

# 禍福は糾える縄の如く(1)

—父・母・先祖の歴史を顧みる—

岡 正章

昨年十二月号『爽樹』「今月の歌」で平川先生が、拙作

「燈火ちかく衣縫ふ母」と歌ひたる昔なつかしかの冬憶ふ  
を取り上げてくださり、

「ここに挙げられた『冬の夜』のうたは私のようなオンチ  
でもここに滲みる。『かの冬憶ふ』とあるので作者はこ  
の歌の様な雰囲気の中で育たれたのだろう」

と書いて下さったので、このことから思い浮かぶことを  
徒然なるままに記してみたいと思う。

まず、その原歌「冬の夜」の歌詞は——(旧かな)

## 冬の夜 (文部省唱歌)

一、燈火ちかく 衣縫ふ母は

春の遊びの 楽しさ語る (注。「春」とは正月を意味する)  
居並ぶ子どもは 指を折りつつ

日数かぞへて 喜び勇む  
囲炉裏火は とろとろ  
外は吹雪

二、囲炉裏の端に 縄なふ父は

過ぎしいくさの 手柄を語る (この一行は戦後「過ぎし  
昔の思ひ出語る」と変えて歌われた)

居並ぶ子供は ねむさ忘れて  
耳を傾け こぶしを握る

囲炉裏火は とろとろ  
外は吹雪

というのである。

わが家は農家ではなく父は職業軍人で、二年ごとに任地  
が移動しそのたびに引越があり、二歳の時満洲にも渡  
ったので、私の幼い頃は、必ずしもこの歌のように穏やか  
な環境ではなかったが、そのような情景が全くなかったわ  
けでもない。

一番の歌詞は、「もう幾つ寝るとお正月／お正月には凧  
揚げて／……」と歌い語りながら、着るものを縫ったりほ  
ころびを繕ったりしている母、そして「居並ぶ」たくさん  
の子供たちの情景。わが家は七人兄弟姉妹だ。母は年を経  
て目が弱り針に糸を通すのが難しくなって、子供に「この  
針に糸を通して頂戴」と頼むようになったことを思い出す。

満洲の冬は極寒で、暖房は囲炉裏ではなくペチカだ。しかし私は満洲では二、三歳くらいだったから、満洲の記憶はほとんどない。

二番の歌詞に移ろう。「囲炉裏の端はたに縄なふ父は……」とあるけれども、私の父は陸士（陸軍士官学校）を出た将校だったから、自分が「縄をなう」ことはしなかった。

しかし私は、稲わらを材料に、両手両足を道具にして縄をない、わら草履を作ることが出来る。内地に戻って奈良から東大阪（当時布施市）に移り小学校二年生のときに「大東亜戦争」が勃発した。緒戦は「起つや忽ち撃滅の／勝ち鬨どきあがる太平洋……」と破竹の勢いで連戦連勝、と思ったのも束の間。あつという間に連戦連敗、本土も激しい空襲に遭うようになった。その頃父は丹波篠山の連隊長から山口の連隊区司令官に異動。幸いに山口は空襲されなかったが、徳島にいた私と同一年の従兄弟は焼夷弾の直撃を受け火だるまになって焼け死んだと聞いた。食糧も物資も不足しいつも腹ペこで、小学校は「国民学校」となり、学校の実習畠でサツマイモ作りに励んだ。縄をなうことや、わら草履を作ることも、「国民学校」で教わったのである。

### 「禍福はあざなえる縄の如し」

「縄なふ父」という歌詞が出て来たことから、右の諺が浮

かんできた。「禍わざわいと幸福は表裏一体で、まるで撚り合わせた縄のようにかわるがわるやってくるものだ。不幸だと思つたことが幸福に転じたり、幸福だと思つていたことが不幸に転じたりする。成功も失敗も縄のように表裏をなして、めまぐるしく変化するものだということのたとえ。」と、ネットで解説されている。出典は中国の古典『史記』。「人間万事塞翁が馬」という諺もある。昔、中国北方の塞とりで近くに住む占いの巧みな老人（塞翁）の馬が胡この地方に逃げ、人々が気の毒がると、老人は「そのうちに福が来る」と言った。やがて、その馬は胡の駿馬しゅんまを連れて戻ってきた。人々が祝うと、今度は「これは不幸の元になるだろう」と言った。すると胡の馬に乗った老人の息子が落馬して足の骨を折ってしまった。人々がそれを見舞うと、老人は「これが幸福の基になるだろう」と言った。一年後、胡軍が攻め込んできて戦争となり若者たちはほとんどが戦死した。しかし足を折った老人の息子は兵役を免れたため、戦死しなくて済んだ——という故事から。人間は「じんかん」とも読み、「世間」とか「運命」を意味するのだという。

さて国書では、平安時代末期の一一八〇年ごろ後白河法皇によって編まれた歌謡集『梁塵秘抄りやうじんひしやう』の中に、「吉凶あざなは糾あざなへる縄の如し」と出て来る。『梁塵秘抄』では、

「遊びをせんとや生まれけむ 戯たはぶれせんとや生まれけむ  
遊ぶ子どもの声聞けば 我が身さへこそ揺るがるれ」

という歌謡がよく知られている。

——人は遊びをしようと思われてきた。戯れに興じようと生まれてきた。遊ぶ子どもの声を聞くと、大人の自分も声に合わせてつい体を揺すってしまふよ。(……はずなのに、大人になるとあくせく働き、人間関係に疲れ悲しみ、不運を嘆き……となつてゐる人が多い!) ということ。

いま、世界的に大変な「コロナ禍」が報ぜられているけれども、この「禍」転じて「コロナ果」がもたらされることを信じ、恐れずに乗りこえて行きたい。

「いくさの手柄」を語らなかつた父博明と

語つた(書き残した)祖父芳太郎

さて、唱歌「冬の夜」二番の歌詞のつづき——

「過ぎしいくさの手柄を語る」に移ろう。

父・岡博明(一八九二—一九六八)は軍人だったが、家族に「過ぎしいくさの手柄を語」つたことは一度もない。語つた、というか「書き残した」ものがあるのは、祖父だ。

祖父・岡芳太郎(一八六四—一九一三)は、陸軍軍医だった。明治二十七年六月、日清戦争勃発の時、三十歳で「衛生隊付」軍医として仁川から朝鮮半島に上陸し、大活躍した。岡家には『岡氏略系』という岡家の由緒歴史を記録した巻物があり、その中で第九代 芳太郎の項に、次のよう

に記している——

(「繃帯処」の「繃帯」は包帯で、負傷者の手当をする所。そこはまた戦死者の安置所にもなつたようだ。)

《(明治二十七年)七月二十九日決戦略況

七月二十八日午後十二時、各隊露营地を發し、大部は成歎駅に、小部は安城渡に向て進軍す。我が衛生隊は安城渡附近に繃帯処を開くべき命を受け、工兵隊の後尾に接して進む。

素沙壕を過ぎ、水田を貫く処の一路を南下する事若干時、俄然轟々として銃声起る。左顧すれば宿霧點怛の表一道銃火閃々たり(午前三時頃)。頭上遽に笛声をなして二之弾丸飛ぶ。相語りて曰く、「成歎駅の開戦乎。弾力甚だ弱し」語未だ了らず、忽ち弾丸雨注 為に耳聾す。馬を下て伏す。地物の弾丸を支ふべきなし。幾度か死を決す。

衆動く。顧れば左右一人なし。暫くして命あり、後方の一部落に退却すべしと。此の退却中医長一等軍医木下俊善昏倒す。之より予、医長となる。

東嶺曙光を發し、衛生隊前進す。此時安城渡の敵潰走し、我兵追撃して成歎駅を攻む。衛生隊は安城渡の河中に繃帯処を開く。時に午前四時四十五分、死傷者続々来る。成歎駅の戦は益々猛烈。我兵の勇往突進の状、歴々指すべし。壮快言ふべからず。清兵遂に潰乱、牙山に向て走る。時に午前八

時頃。此に於て繃帯処を成歎駅の松林中に移す。

此役にて我兵即死七名、負傷四十四名、壕中に溺死せしもの二十三名。此日我兵は長駆牙山を略す。衛生隊は午後十二時平沢駅に到て露營し、翌三十日牙山に入り、八月五日孔德里に凱旋す。》

——右「成歎牙山の役」は、日清戦争の宣戦布告（八月一日）以前に中国軍が突如攻撃してきたので応戦して始まった戦いだった。この戦いの後、芳太郎は痔瘻症で手術を受けたが、手術後すぐに強いて退院し勤務に服した。それから脚気や赤痢に罹り、遂に十一月広島陸軍予備病院へ還送されたという。その後心臓疾患も出て軍務には堪えられないと軍医を辞し、故郷愛媛県の宇和町で開業医となった。

この日清戦役での功により芳太郎は同年三十歳の時に「勳六等单光旭日章」を受章。明治三十七八年戦役（日露戦争）の時は軍の将校・生徒・志願兵志願者等の身体検査医を務め、「明治三十九年勳五等双光旭日章を給ふ。同四十年東宇和郡医師会会長就任。大正二年九月、脂肪心にて没す。享年五十一歳。」と『岡氏略系』にある。

### 岡家先祖のことなど

岡家先祖は元仙台の伊達公に仕えていた武士で、政宗の

長子秀宗が分家し伊予宇和島藩主となった時、これについて来た。そのことも前述の『岡氏略系』に記されている。現在の岡家は宇和島岡家から分家し、吉田町で森一（一六五六〜一七三九）が吉田岡氏初代となる。祖父芳太郎は第八代、父博明は第九代で、正章は十代目である。

### 父博明の回顧録より

父博明は、祖父芳太郎の命令で陸軍軍人になったと、回顧録に書いている。以下、博明の回顧録より抜粋。

《私は明治二十五年十一月、香川県丸亀市で生まれた。当時父が丸亀第十二連隊付の軍医中尉であったからだ。

父は子供の時から秀才であった。郷里愛媛県の吉田町におったが、当時選抜試験で県下全部で僅か十数名の官費医学生試験に合格し医者となり契約の通り軍医となった。

祖父興成も医者で宇和町のすぐ南、皆田という所に開業しておった。その上の曾祖父太仲も医者であった。その上五代までは、初代からずっと宇和島藩伊達候の祐筆（秘書のようなもの）で書が巧みであった。そして武士であったが五代森興の時であったか、悪い人の讒言によって武士をやめさせられ、平民となったのだそうだ。

さて生まれた所丸亀については、何の記憶もない。ついで父は広島連隊へ転任になった。この時日清戦争が始まり

父は第五師団に属して朝鮮に渡り激戦に参加した。朝鮮で赤痢のような病気のため内地に帰還し、それから官も退職。迎えられる宇和町久枝村へ村医も兼ねて来た。

当時私は五、六歳になっていたので、ぼつぼつ記憶がある。父は馬が好きで又、田舎の事とて交通機関がないから馬を飼って往診に使っておった。父は外科を得意とし、大きな手術は大抵うちへ持って来た様で、其の大手術の時痛さの為、患者のわめく声を出すのをよく聞いたものである。

母の事については大きくなってから兄弟によく話をしたが三十歳まで私は叱られた事より外にはあまり頭に残っておらぬ。母はこわい、叱ってばかりいた人で、ちつとも可愛がって貰った覚えが無いと話したのだが、妹等は全然違った感じを持って、愛の人、大いに可愛がって貰ったと言う。四十、五十になってよく考えて見ると成る程可愛がって貰っておった事がわかった。

忘れもせぬのは広島幼年学校へ試験が通って、さて出発する朝、食事をする時に母はポトポトと涙を落とした。その涙は私の胸を打った。愛の涙は終生忘れる事はできぬ。

父母の間は仲が悪かった。その為にみんな苦勞をした。子供六人が皆健全に且つ相当に成人したのは母のおかげである。母のした事は偉いものであると今更感謝讚嘆に堪えぬのである。

小学校は尋常科と高等科とあって、私は尋常科四年を終

え高等科に入り二年が済んで松山市の北豫中学校へ入った。それは当時父が日露戦争で召集を受けて、松山連隊付となっておった為である。北豫中学では成績は上の上で一、二番の所におつたが、一年の終わり頃に、父が幼年学校に入って陸軍将校になれば半ば強制され、有無を言わず試験を受けさせられ、成績は中の上で合格し、明治三十九年九月に広島幼年学校に入った。

当時は日露戦争で大勝利を得、軍人は尊敬もされ、威張っておつたから、又父は軍医であつたから、自らの息子を本科の将校にしたい気持ちであつたのであろう。子供の考え等はその当時は殆ど無視され、家長のワンマン時代であつたから、子供の進路も半命令的であつたのだ。私は体も小さく、荒々しいことを好まぬ性質であつたので軍人は適当でなかつたようだ。従つて大いに成功もしなかつた。人はその性格にあつた職業を選ばねば大成はしない。自らの性質をよく内察し、適合した職業を選ぶべきである。人生の一大事であるから熟考深慮を要する。

幼年学校には図書室があつて種々の本が備えてあつたが、私は英雄の伝記が好きで、殊にビスマルク、ナポレオン、シーザー等、毎日読み耽つたものだ。そして励まされ教えられた。青年の時代には偉人の伝記を読むことは大いに為になる。性欲的な本の氾濫しておる現時、大いに考うべきであると思ふ。又、図書室には、一台の古びた「オル

ガン」があつて、私等は是を弾いて楽しんでものだ。

遊戯班と云う編成があつて、全校を四班に分け、各班に、一年生、二年生、三年生がおり、運動時間はその班毎にかけあし駢歩をやらされたのだ。意地の悪い上級生がおる班は下級生が難儀をした。上級生にも種々な人がおつたが、意地悪く下級生をいじめたような者は大抵、将校になつてよくない。病気になつたり、早く辞めさせられたり、つまらぬ死に方をしたような者が多かつた。人の良い人、下級生を可愛がつたような人は、最後が良かった人が多い。妙なものである。因果応報と云うものか。

生徒監と云う生徒監督指導の将校が各学年に一人づつあつたが、その人等は流石さすが選拔せられた人だけあつて皆良い人で、今でも懐かしく思い出す。六十年経つて思いだしてみると、確かに因果応報と云うことはあると思う。……》

——これを書いた父博明は、「大乘院芳勳武彰覺阿居士」という法名（戒名）を載いているが、実はあまり武人らしからぬ武人であつたと思う。前述のように、家族に「過ぎしいくさの手柄を語」つたことなど一度もない。

### ノモンハン事件

父の書棚には『ノモンハン事件』という書物が数冊並んでいたことを覚えている。ノモンハン事件とは、野中郁次

郎編著『失敗の本質』で「大東亜戦争敗戦の序曲」として最初に挙げられている日本軍大敗の悲惨な事例である。

私が生まれた昭和八年、十一月に父は満州国独立守備隊付として渡満し、「匪賊討伐」に当っている。「昭和十年三月に家族全員来満」と『岡氏略系』にある。それまで単身赴任だったわけだ。十一年八月に帰国、奈良聯隊付。十二年七月支那事変起り動員発令、十三年九月満洲出張あり。十四年三月中支に出動し戦闘参加数十、信陽方面独立支隊の指揮等に当る。そうした時ノモンハン事件は起きた。

昭和十四年五月十一日、満洲西北部蒙古との国境に近いノモンハンで約20〜60名の外モンゴル軍と満州国軍との間で武力衝突が発生。これに対し日本の関東軍は直ちに出動し、外モンゴル軍は撤退したので帰還した。だがその後再びソ連軍と外モンゴル軍が進出してきたので関東軍はまた進撃を開始したが、圧倒的なソ連軍の砲撃を浴びて主力は動けず、先頭の搜索隊二百名は孤立しソ連軍の砲撃と戦車により全滅。任に当っていた第二三師団の小松原師団長は撤収命令を出し、第一次ノモンハン事件は終了した。

ところがその後ソ連・外モンゴル軍陣地は次第に強化され兵力も増強されていると見られたので、小松原師団長はこのような状況を関東軍に報告し、第二三師団はその防衛の責任上ただちにソ連・外モンゴル軍を攻撃すべきである、との意見具申を行なった。その意見は容れられて関東

軍は大本營の明確な指示がないまま六月二十七日、外モンゴルの空軍撃滅をめざし越境爆撃を開始。大本營と関東軍の意思の齟齬があらわになったが、もはや勢いは止められず、攻撃を進めた。ところがソ連軍の注力は関東軍の予想をはるかに超えたものだった。日本軍の火砲・弾薬は圧倒的に劣っていて不足しており、敵情も正しく把握していなかった。七月、八月とソ連軍の大攻勢に日本軍は分断包囲され、第二三師団は全滅の危機に瀕し、遂に八月二十九日、残存部隊に撤退命令を出すに至る。八月三十日、作戦終結に関する大命が降ったが、表現が明確さを欠いていたので終息するには九月六日までかかった。

このノモンハン事件における日本軍の戦死者は七六九六名、戦傷八六四七名、生死不明一〇二一名、計一万七三六四名。日本軍もよく戦ったのでソ連・外モンゴル軍も戦死・戦傷併せて一万八五〇〇名の兵士を失った。

この戦いで多数の日本軍第一線部隊の連隊長クラスが戦死し、あるいは戦鬪の最終段階で自決した。また生き残った部隊長のある者は、独断で陣地を放棄して後退したとしてきびしく非難され、自決を強要された。日本軍は生き残ることを怯懦とみなし、高価な体験、失敗の教訓をその後にかす道を自ら閉ざしてしまった。

「人生は学校だ、そして失敗は成功よりも優れた教師なのだ」とトルストイの『人生読本』にあるが、その優れた教

師から学ぶことをしなかったのは勿体ないことである。

父博明はノモンハン事件の戦鬪に直接関わってはいなかったが、この事件の直前には満洲に派遣されており、事件の最中には中支に出征している。父は戦争のことを家族に一言も話さなかったが、ノモンハン事件が他人事（ひとごと）でなかったことを、書棚の本は示していると思う。

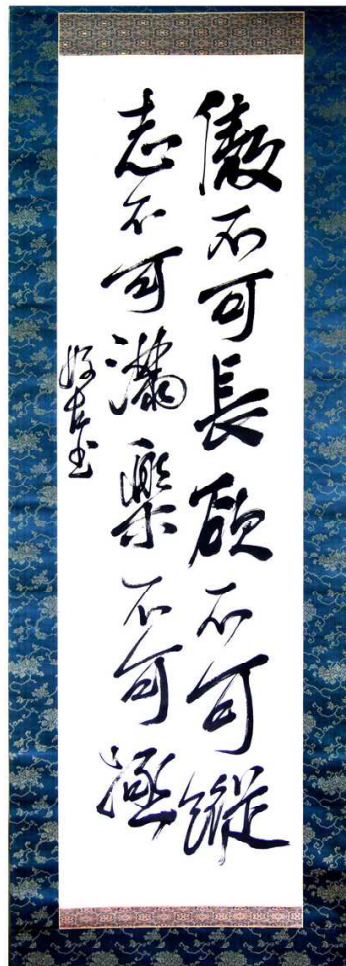
### 秋山好古の書、掛軸に

さて、わが先祖の故郷愛媛県は司馬遼太郎の名著『坂の上の雲』のヒーロー秋山好古・真之兄弟の出身地だ。わが家にはその秋山好古（一八五九～一九三〇）、「日本騎兵の父」と言われる）の書を掛軸に表装したものがあつた。次頁写真は、その書と、父博明・母美和子が並び坐している。

「傲不可長 欲不可縱 志不可滿 樂不可極」と書かれてある。「傲りは長ずべからず 欲は 縱にすべからず 志は滿つるべからず 樂は極むべからず」と読むのだろうか。そして、「傲り（慢心して慎みを忘れること）の心を伸ばしてはいけない。私利私欲を慎み、勝手放題にしてはいけない。己を律せよ。志は高く持ち、これでよいと満足慢心せず精進せよ。『歡樂極まって哀情多し』（楽しみ尽きて哀しみ来たる）を心せよ。」ということだろうか。

この好古の書は、どのような経路で岡の許に入ったのか





不詳だが、八代芳太郎が好古の年代に近く（好古の方が五年先輩）、尊敬し見習うべきものと考え、九代博明にこれを継がせていたのではないかと思われる。

『坂の上の雲』によると、秋山家は貧しい最下級武士であったが、兄の好古は大変な弟思いで、真之が生まれた時、

両親が生活苦から「どこぞ、お寺にでも」と相談しているのを聞き、「赤ん坊をお寺にやっちゃ嫌ぞな。うちが勉強してな、お金を拵えてあげるがな」と抗議したという。

好古は世界最弱と言われた陸軍騎兵隊に、世界で初めて機関銃を装備し鍛え上げ、日露戦争時、ロシアのコサック騎兵隊を打ち破った。だが好古は、日露戦争のことについて聞かれてもあまり語らず、「戦争はよう負けたよ」と言っただけ、功を誇るようなことは決してなかったという。

『文藝春秋』二〇一七年四月号は「『明治百五十年』美しき日本人」という特集を組んでおり、秋山好古は「教育者となった『日本騎兵の父』」としてその一人に選ばれている。その記事の中で好古の孫である秋山哲児氏は、祖父好古のことについて次のように語っている。

《軍人としての好古には、多くの逸話が残っています。

印象に残っているのは、日清戦争の旅順攻略を前にした敵情探索を行った際の話です。秋山支隊は土城子付近で、清国の騎兵・歩兵千数百と遭遇します。対するわが方は二百ほど。通常ならば退却するのですが、好古は、「退却すると日本の騎兵は弱いというイメージを与えてしまおう」と考え、攻撃をしかけます。しかし清国軍は次第に増援を進め、総勢二千以上に。秋山支隊も歩兵を含め四百ほどに増やしますが、結局、撤退を余儀なくされます。その時好古は足の遅い歩兵をまず先に逃がし、次に騎兵を逃が



す。その間、清国軍からの攻撃から守るために、指揮官である好古自らがしんがり殿をつとめたというのです。

好古は、とにかく部下を大事にしています。日清戦争から凱旋した時の逸話です。日清戦争が終わり帰国したとき、数ヶ月分の給料が手許に残っていました。普通ならば留守宅を預かった妻に渡すものでしょうが、そうせず、全額を副官に差し出し、労をねぎらったのです。

好古はお金に頓着しませんでした。日清戦争後の一九〇〇年に起きた清国内の排外運動「義和団の乱」が、日本や欧州の連合国に鎮圧された後、好古は日本の駐屯軍守備隊司令官でした。居留日本人から好かれていたので、任務を終え帰国が決まると、盛大な送別会が開かれ、七百ドルもの賤別が集まりました。日本の領事は、そのお金で高級時計を買って贈ろうとしたのですが、好古は現金にしてほしいと頼みます。好古はこう言いました。

「何も誇らしい功績を残していないのに贈り物をいただくことは慚愧に堪えません。ついては、この現金はこのまま居留民の小学校に寄付して教育資金にしていたきたい」  
会場には拍手が響いたそうです。》

のちに大将として定年で予備役になる前、元帥に推す声があったが固辞し、松山の北豫中学校長にと請われ喜んで引き受けた。中学では軍事教練の時間を増やすことを提案

されたが反対し、「学生は兵隊じゃないよ」と、逆に教練の時間を減らしてしっかり勉強させるように指示した。そして大正十三年から昭和五年四月まで足かけ七年間、無遅刻無欠勤で北豫中学に通った。毎日決まった時刻に家を出たため、通りの人々は好古の姿を見て時計を合わせたというエピソードがあるという。

こうして志高く勉学に励み、己を律し私利私欲を慎み、何よりも公に奉仕するという清々しい精神を貫いて生きた秋山好古の前掲「傲りは長ずべからず」の書には、千鈞の重みがあると思う。わが家の宝として子孫に残したい。

#### 腕白坊主だった弟真之

好古の弟真之まねきは幼い時腕白者で母お貞は手を焼き「淳(真之の幼名)、お前もお死に。あしも死にます」といって短刀をつきつけたこともある。が、長じて海軍兵学校を首席で通し、日本海海戦では連合艦隊作戦参謀を務め、世界最強といわれたバルチック艦隊を破り日露戦争の趨勢を決めた。東郷平八郎司令長官は「智謀湧くが如し」と評したという。ロシヤ艦隊の主力艦のごとくは撃沈、自沈、捕獲されるといふ、当事者たちでさえ信じがたい奇蹟。一方「わが方の損害は水雷艇三隻」といふ、信じがたいほどの軽微さで、無傷というに近かった。日本海海戦が、人類が

なしえたとも思えないほどの記録的勝利を日本があげたとき、ロシア側ははじめて戦争を継続する意志をうしなつた。というより、戦うべき手段をうしなつた。日本ももはや戦いを継続する余力を失つていた。

このときロシアに講和調停を働きかけたのは、米国大統領セオドル・ルーズベルトであつた。

英国のポーツマスで九月五日講和条約に調印、十月十四日に批准された。東郷とその連合艦隊の大部分は凱旋の命令があるまで佐世保港内にとどまつていた。

そういう待機期間中、珍事がおこつた。旗艦「三笠」が自爆し、六尋の海底に沈没してしまつたのである。九月十一日午前一時すぎ。三百三十九人の戦友が、敵弾で斃れることなく戦勝後事故で一挙に死んだ。日本海海戦で日本側の戦死は百数十人にすぎなかつた。戦闘で死んだよりもはるかに多数の人間が火薬庫爆発といういわば愚劣な事故で死んだことに、真之は天意のようなものを感じた。旗艦「三笠」の沈没は、日本に恩寵をあたえすぎた天が、その差引勘定をせまろうとする予兆のようにも思われたのである。

「天佑ト神助ニ由リ、我カ聯合艦隊ハ五月二十七八日、敵ノ第二、第三聯合艦隊ト日本海ニ戦ヒテ、遂ニ殆ト之ヲ撃滅スルコトヲ得タリ」と、真之は報告文の冒頭に書いた。

真之は文章家だつた。「皇国の興廢この一戦にあり。各員一層奮励努力せよ」とZ旗を掲げ全軍の士気を鼓舞した

名言も、「敵艦見ゆとの警報に接し、連合艦隊はただちに出動これを撃滅せんとす。本日天気晴朗なれども波高し」と大本営に打電した文章も、真之の起草した文章である。

戦時編制である「連合艦隊」が解散したのは十二月二十日で、その解散式は翌日旗艦においておこなわれた。旗艦はこの時、「敷島」から「朝日」になつていった。

### 「勝つて兜の緒を締めよ」

解散式がはじまり、東郷司令長官は、「告別の辞」とひくい声で言い、秋山真之が書いた有名な「連合艦隊解散ノ辞」を読み始めた。

「……百発百中の一砲、能く百発一中の敵砲百門に対抗しうるを覚らば、我等軍人は主として武力を形而上に求めざるべからず。……惟ふに武人の一生は連綿不斷の戦争にして、事有れば武力を發揮し、事無ければこれを修養し、終始一貫その本分を尽さんのみ。これに参加し幾多啓発するを得たる武人の幸福、比するものなし……」

そして最後は以下の一句でむすんでいる。

「神明は、ただ平素の鍛錬に力め戦はずしてすでに勝てる者に勝利の栄冠を授けると同時に、一勝に満足して治平に安ずる者よりただちにこれをうばふ。古人曰く、勝つて兜の緒を締めよ、と。」

この文章はさまざまの形式で各国語に翻訳されたが、とくに米国大統領のセオドル・ルーズベルトはこれに感動し、全文を翻訳させて自国の陸海軍に配布したという。

## 母 お貞の死

バルチック艦隊が五月二十七、八日の両日で全滅したにもかかわらず、満州の最前線にいる好古は六月十五日豪雨を衝いて基地を出発し、ロシアの騎兵団と激烈な戦闘をまじえていた。その戦場で好古は母親のお貞が病没したというしらせを受けた。真之は佐世保で知った。

——淳、お前もお死に。あしも死にます。といって幼いころの真之の腕白に手をやいて本気で短刀をつきつけたこの母親の死の報に接し、真之は佐世保の旅館の一室で終夜号泣した。兄の好古は母のお貞が「淳」という真之の腕白に手を焼いていたことも知っていたし、終生真之をもっとも愛していたことも知っていた。

「あの腕白小僧をなんとか成人させたことは無駄ではなかったということ、母は日本海の戦闘結果を知ってつくづく思ったことだろう」と、好古は友人に書き送っている。

## 歴史は糾える縄の如く変転する

さて昨二〇二〇年はコロナによって、コペルニクスの転回という表現が誇張でないくらい世の中が変わってきた。

敗戦の一九四五年を起点として七十五年目だった。

一九四五年から七十五年さかのぼると一八七〇年。黒船が来航し、明治維新で年号が明治に変わったのがその二年前の六八年だった。くしくも戦後国家と戦前の明治国家は同じぐらいのときを経たことになる。

コロナは黒船に相当し、今はやはり歴史の転機で、新しい時代がここから始まろうとしているのか。

明治日本は東洋の国の中で世界で初めて欧米の国々に肩を並べる文明国として認められるような奇蹟的、驚異的発展を遂げた。その中で、日露戦争勝利ということは特記すべきことだった。これは他のアジア諸国の若きリーダーたちを興奮させ、独立意識を目ざませた。これが種となつて、やがて第二次世界大戦後に続々とアジア諸国が欧米の植民地から独立するに至るのである。

『文藝春秋』二月号で、片山杜秀もりひで(慶應義塾大学教授)／佐藤優(作家・元外務相主任分析官)対談「司馬遼太郎『坂の上の雲』大講義」第二回の冒頭、次のように語っている。

《片山 前回の結論は「『坂の上の雲』は読み継がれるべき『国民文学』」ということでしたが、それに倣えば、主題たる「日露戦争」の方は、まさに「国民の戦争」でした。

佐藤 「国民が総力を挙げて戦う総力戦の端緒となった」と言えますが、それ以前に「この戦争を通じて近代日本に初めて『国民』が生まれた」という意味で、まさに「国民

戦争”でした。

片山 この戦争を機に、多くの人々が「自分も日本という国と運命を共にしている」と意識するきっかけになった、ということですね。

佐藤 そうです。……と。

しかしながら日本国民は、秋山好古が「傲りは長ずべからず」と言い、弟真之が「勝って兜の緒を締めよ」と言ったのと裏腹に、日露戦争の成功体験に酔いしれて己を見失い、大東亜戦争惨敗の道へと突き進んでしまった。

去る一月十二日九十歳で亡くなった作家の半藤一利さんは、十五歳の時大空襲の炎に包まれ逃げ惑った末に川に落ち、誰かに襟首をつかまれて船に引き上げられたのだという。昭和史の結論として「それにしても何とアホな戦争をしたものか」「根拠なき自己過信と、まずくいつたときの底知れぬ無責任」と書いている。

しかしながら日本は、敗戦後も奇蹟的に不死鳥の如く甦り、三十数年にして自由経済世界で「ジャパン・アズ・ナンバー・ワン」といわれるような高度成長を遂げた。

しかしながらまたもや日本はこの成功体験に固着し、「神明は一勝に満足して治平に安ずる者よりただちにこれらうばふ」と真之が「連合艦隊解散ノ辞」に書いたように、「失われた平成の三十年」で大きく変化する世界の進歩から取り残されていた。そこにコロナウイルスが襲う。

コロナ危機とは、まさに戦争状態だと言えよう。

ここに「しかしながら」が三度重なった。

国家の運命もまた、禍福は糾<sup>あざな</sup>える繩の如しであった。

### 新しい時代を切り拓く年の始まり

「今の仕組みが根本的にダメなのだから、平成の失われた三十年はこれからまだ二十年つづくだろう。このままでは先がないと思った時に初めて構造転換がおこり社会が変わる。コロナは黒船だと思つたらよい」

と、東大大学院情報学環の吉見俊哉教授は著書『大予言』で厳しい見方を示している。

明治国家は大日本帝国憲法が公布されたのが一八八九年で、国のかたちが整うまで明治改元の一八六八年から二十年かかった。それを思えば、今年は新しい時代を切り開くための二十年の始まりかも知れない。成功体験の記憶から抜けきれない戦後システムを、いさぎよく変革して行かねばならない。大変な時代かも知れないが、

「遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけむ」と『梁塵秘抄』にあるように、明るく積極的に困難に戯れる気持で乗りこえて行きたいと思う。

あざなへる繩のごとくに願はくは

コロナ禍転じて福を連れ来よ